

第2章 「スポーツ指導者のスポーツ経験とスポーツ観に関する調査」 結果報告

高峰 修¹⁾

本章では、日本スポーツ協会に登録する公認スポーツ指導者を対象に実施した「スポーツ指導者のスポーツ経験とスポーツ観に関する調査」の結果について報告する。

1. 調査および日本スポーツ協会「公認スポーツ指導者」の概要について

2017年度に実施した「スポーツ指導者に求められる指導上の配慮に関する調査」では、性的マイノリティに関するスポーツ指導者の知識や認識、知識習得の必要性や学習行動等についての現状を把握した。本年度の「スポーツ指導者のスポーツ経験とスポーツ観に関する調査」ではやはり公認スポーツ指導者を対象として、2017年度に質問できなかった「同性愛嫌悪」を調査項目に含めた。同性愛嫌悪とは同性愛に対する極度の恐怖や嫌悪のことであり、単なる心理状態だけではなくからかいや無関心、侮蔑的言動、憎悪による暴行といった言動としても表れるといわれている。本調査では心理状態としての同性愛嫌悪について測定した。

調査対象は日本スポーツ協会のマイページに登録する公認スポーツ指導者（98,981名）であり、WEB回答フォームによる調査を実施した。主な調査内容は基本的属性に加えて「同性愛嫌悪」を測定する7項目である。

調査方法：Web調査（Web回答フォームをメールで配信）

調査委託業者名：株式会社マクロミル

調査対象：公益財団法人日本スポーツ協会公認スポーツ指導者マイページ登録者98,981名
(2018年10月1日現在、資格保有者の重複除く)

調査実施期間：2018年11月16日～12月7日の22

日間

回収率：5.7%（5,621名）

統計分析：因子分析については主因子法、バリマックス回転を用い、固有値1.0以上の基準で因子を抽出、全因子による寄与率は60%を目安にした。信頼性係数についてはアルファ係数の目安を0.6以上とした。またGP分析は、各尺度の総合得点を三分位で区切り、上位と下位のグループで各尺度項目の平均値に差があることを確認した。

2. 結果

(1) 個人的属性

本調査の分析対象5,621名の基本的属性を表1に示した。

- a) 自認する性別：自認する性別としては女性と男性に加え「答えたくない」「わからない」を準備した。女性が23.8%，男性が75.7%を占めたが、「答えたくない」と回答した人が0.3%，「わからない」が0.2%ほどいた。割合としてはわずかであるが人数としてはそれぞれ17人、11人である。
- b) 年齢層：年齢層としては50歳代が最も多く31.1%であった。以下、40歳代（25.5%）、60歳代（19.4%）、30歳代（12.4%）と続き、30～60歳代で9割弱を占める。
- c) 最終学歴：大学卒業が約50%，高等学校卒業が約25%を占め、専門学校卒業8.1%，大学院修了7.8%，短大・高等専門学校卒業6.5%と続く。
- d) 保有する指導者資格：指導者資格についてはあてはまるものすべてに回答を求めた複数回答方式で質問した。指導員が最も多く55.7%と半数以上を占め、コーチが16.0%，上級指導員が9.4%，ジュニアスポーツ指導員が7.8%であった。
- e) 日常的なスポーツ指導：d) にあげた指導者

1) 明治大学

表1 分析対象の基本的属性

自認する性別	n	%	指導者資格（複数回答）	n	%	1年間のスポーツ指導	n	%
女性	1,339	23.8	指導員	3,130	55.7	指導しなかった	921	16.4
男性	4,251	75.7	上級指導員	526	9.4	指導した	4,700	83.6
答えたくない	17	0.3	コーチ	902	16.0	全体	5,621	100.0
わからない	14	0.2	上級コーチ	221	3.9	指導の頻度	n	%
全体	5,621	100.0	教師	331	5.9	ほぼ毎日（週に6回以上）	744	15.8
年齢層	n	%	上級教師	45	0.8	週に4～5回程度	888	18.9
29歳以下	357	6.4	スポーツプログラマー	124	2.2	週に2～3回程度	1,434	30.5
30歳代	695	12.4	フィットネストレーナー	25	0.4	週に1回程度	756	16.1
40歳代	1,435	25.5	ジュニアスポーツ指導員	441	7.8	月に2～3回程度	361	7.7
50歳代	1,752	31.1	アスレティックトレーナー	236	4.2	月に1回程度	189	4.0
60歳代	1,091	19.4	スポーツドクター	158	2.8	2～3ヶ月に1回程度	162	3.4
70歳以上	291	5.2	スポーツデンティスト	29	0.5	半年に1回程度	97	2.1
全体	5,621	100.0	スポーツ栄養士	38	0.7	1年に1回程度	56	1.2
最終学歴	n	%	アシスタントマネジャー	289	5.1	それ以下の頻度	13	0.3
中学校卒業	35	0.6	クラブマネジャー	49	0.9	全体	4,700	100.0
高等学校卒業	1,451	25.8	(旧資格)スポーツトレーナー	18	0.3	指導のレベル	n	%
短大、高等専門学校卒業	365	6.5	その他	138	2.5	国際レベル	420	7.5
専門学校卒	455	8.1	全体	5,621		全国レベル	1,956	34.8
大学卒業	2,849	50.7				地域レベル（“東北大会”など）	594	10.6
大学院修了	437	7.8				都道府県レベル	1,087	19.3
その他	29	0.5				市区町村レベル	749	13.3
全体	5,621	100.0				その他	815	14.5
						全体	5,621	100.0

資格を保有する回答者の日常的なスポーツ指導の有無について質問した。調査前1年間のスポーツ指導について指導をしなかった人は16.4%であり、8割を超える人々はスポーツ指導に携わっていた。

f) 指導頻度：スポーツ指導を行っている場合の頻度について、割合が最も多かったのが「週に2～3回程度」であり30.5%、「週に4～5回程度」18.9%、「週に1回程度」16.1%、「ほぼ毎日」15.8%と続く。つまり本調査の回答者の8割以上は週1回以上の頻度でスポーツ指導に携わっており、比較的高頻度で指導を行っている集団だといえることができる。

g) 指導レベル：指導者として競技者を出場させた最高の競技会レベルについては、34.8%の人が競技者を全国レベルの競技会に出場させた経験を持ち、回答者は全体的に高いレベルで指導を行っていることがわかる。都道府県レベルが19.3%で続くが、市区町村レベルやその他のレベルもそれぞれ13.3%、14.5%ほどおり、3割弱はローカルレベルでの指導に

携わっていることになる。

(2) 同性愛嫌悪

同性愛嫌悪については、飯田ら（2016）が採用したHudson and Ricketts（1980）のIndex of Homophobia25項目5件法を参考にした。そこから日本の状況にはそぐわないと思われる項目や質問内容が重複している項目を削除し、最終的に7項目に絞った。また調査の実施自体が同性愛者を差別する状況になることを回避するために、各項目の表現はすべて肯定的・友好的なものにした。

図1には同性愛嫌悪を示す7項目の単純集計結果を示した。①と②の項目は自分の身の周りに同性愛者がいた場合の友好的価値観を示しているが、「そう思う」と「とてもそう思う」を合わせた肯定的価値観をもつ人の割合は7項目中最も多く、②で72.8%、①で69.4%を占めた。③と④は自分が同性愛者の性愛対象としてみられたり、あるいは自分自身を同性愛者だと認識することへの考えを示している。これら2項目について肯定的価値観をもつ人の割合は他の5項目と比べてやや

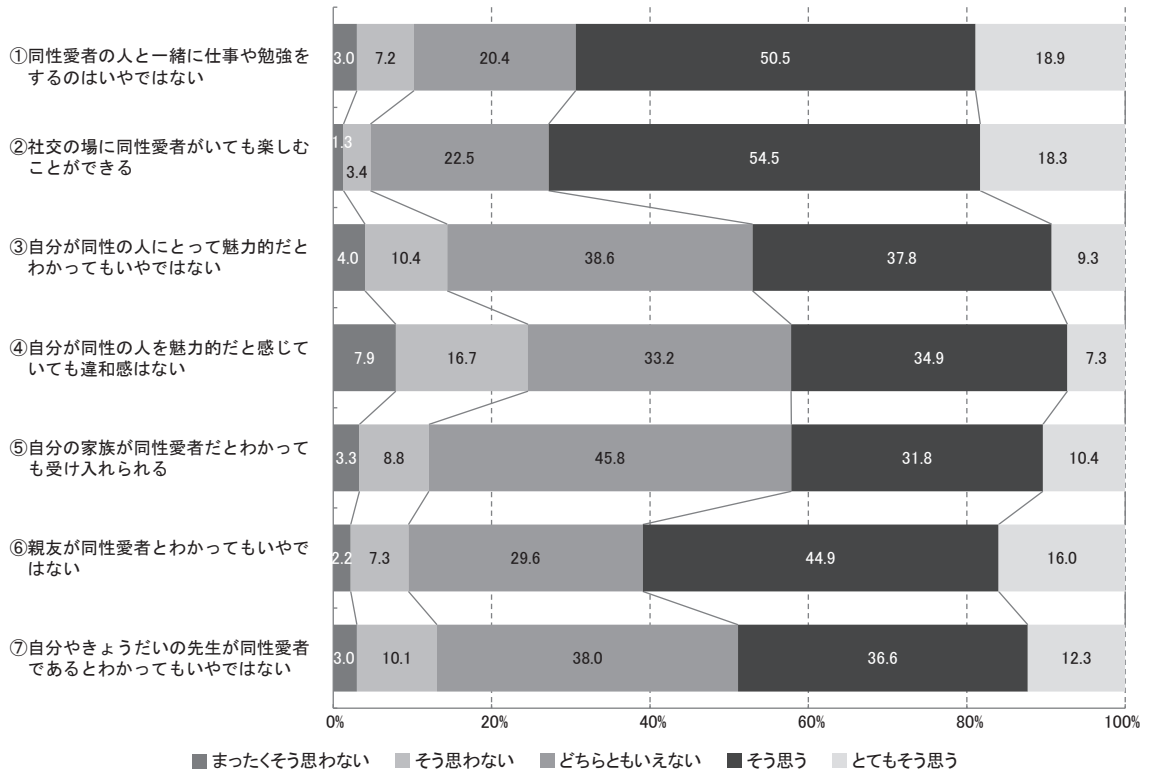


図1 同性愛嫌悪感項目の分布 (n = 5,621)

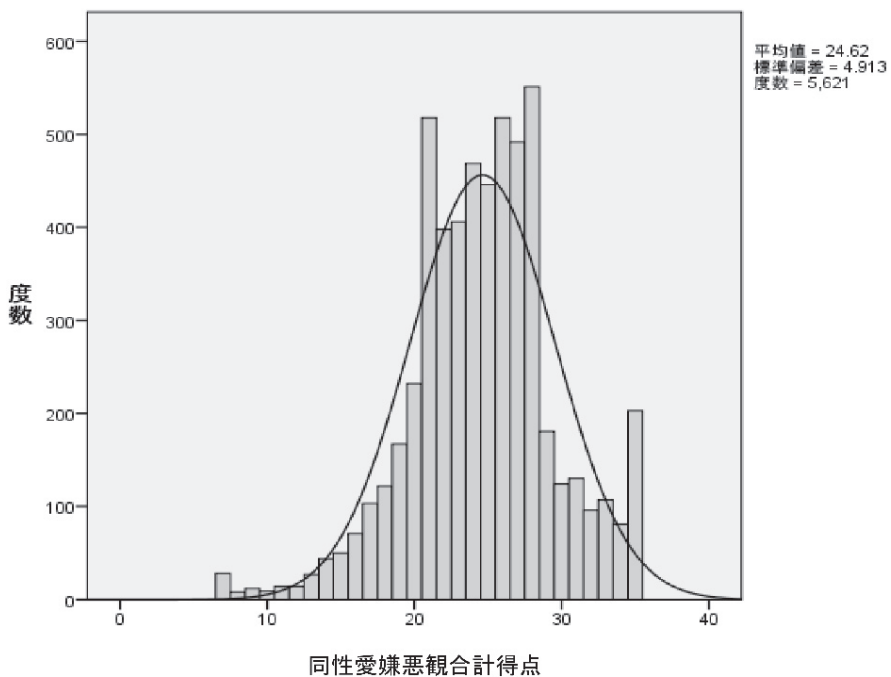


図2 同性愛嫌悪観合計得点のヒストグラム

少なくなり、③で47.1%、④で42.2%であった。⑤、⑥、⑦は身の周りにいる人が同性愛者だとわかった場合の考えを示している。これら3項目のうち友好的な価値観をもつ人の割合が最も高かったのが⑥の「親友」(60.9%)についてであったが、「自分やきょうだいの先生」や「家族」となるとその割合はそれぞれ48.9%、42.2%と減少した。つまり同性愛の当事者が親友であれば受け入れられるが、家族に関わった事柄となるとやや嫌悪感が生じる傾向を確認することができる。

これら7項目について主因子法による因子分析を行ったところ1因子が抽出された。この1因子の固有値は3.63、寄与率は58.4%であり、わずかながら60%を下回った。因子負荷量は0.542~0.821ですべて正の値であった。7項目によるクロンバックの α 信頼性係数は0.876であり、高い信頼性を保持しているといえる。これら7項目の合計得点を算出しGP分析を行ったところ、すべての項目において合計得点の上位三分位と下位三分位の間で平均値に有意差が確認され、7項目すべてが弁別力をもっていることが確認された。図2には7項目を合計した同性愛嫌悪得点のヒストグラムを示した。得点は7~35点の範囲で分布するが、得点が低いほど同性愛者を嫌悪する傾向が強く、高いほど同性愛者に友好的な価値観をもつことを意味する。得点の分布は平均値の前後、ならびに最高点の35点に偏る傾向を示している。

(3) 同性愛嫌悪と基本的属性との関連

以上、7項目からなる同性愛嫌悪について、表1に示した基本的属性のカテゴリ間に差があるかを確認するためにMann-Whitney検定とKruskal-Wallis検定を用いて平均値の差の検定を行った。

表2ならびに表3には各基本的属性の同性愛嫌悪得点の平均値の差の検定結果を示した。各基本的属性における統計値はこれらノンパラメトリック検定の結果であるが、参考までに各カテゴリの算術平均値(以下、平均値)も示してある。繰り返しになるが、本報告では同性愛嫌悪得点が低ければ同性愛嫌悪が強く、高ければ同性愛嫌悪が弱いことを意味する。

- a) 自認による性別(表2): 自認による性別の4カテゴリの平均値には0.1%水準で有意な差が認められた。平均ランクならびに平均値をみると、男性の値が最も低く、女性、「答えたくない」「わからない」の順で値が高くなっている。つまり自認による性別の4カテゴリにおいては、男性において最も同性愛者を嫌悪する傾向が強く、自分の性別について「わからない」と回答した人がもっとも同性愛に友好的な価値観を示していることになる。同性愛嫌悪と性別に関してはいくつか先行研究があり、飯田ら(2016)もその一つであるが、いずれも女性が男性よりも同性愛者に対して友好的な価値観をもつことが報告されている。本調査結果もそうした先行研究と同様の結果を示している。
- b) 年齢層(表2): 年齢層の各カテゴリにおいても0.1%水準で有意な差が認められた。平均ランクならびに平均値によると、29歳以下の値が最も高く、年齢層が高くなるほど平均ランクの値は低くなり、70歳以上が最も低かった。つまり年齢層と同性愛嫌悪とは反比例の関係にあり、年齢層が若いほど同性愛に対して友好的な価値観を示していることがわかる。
- c) 最終学歴(表2): 最終学歴においても0.1%で有意な差が認められたが、学歴の高低と同性愛嫌悪傾向との間に一貫した関連は見られない。同性愛に最も友好的な価値観を示したのは「短大・高等専門学校卒」であり、以下「その他」「大学院修了」「専門学校卒」「四大卒」「中学卒」「高校卒」と続く。
- d) 指導者資格(表3): 保有している指導者資格としては「その他」を含め17資格を準備したが、そのうち各資格の有無によって同性愛嫌悪の平均値に差が認められたのは「上級指導員」「教師」「上級教師」「アスレティックトレーナー」「スポーツ栄養士」の5資格であった。そのうち「上級指導員」と「上級教師」を除く3資格では、各資格を保有している人は保有していない人よりも平均ランクおよび平均値が高く、つまり同性愛者に対して

表2 基本的属性における同性愛嫌悪感の平均値の差の検定：Kruskal- Wallis検定による

	n	算術平均値	平均ランク	統計値
性別				
女性	1,339	27.10	3669.72	$\chi^2 = 538.69$ d.f. = 3 p < 0.001
男性	4,251	23.80	2528.63	
答えたくない	17	29.06	4182.59	
わからない	14	31.71	4754.79	
年齢層				
29歳以下	357	27.51	3736.19	$\chi^2 = 356.94$ d.f. = 5 p < 0.001
30歳代	695	25.83	3241.49	
40歳代	1,435	25.02	2960.77	
50歳代	1,752	24.50	2760.02	
60歳代	1,091	23.30	2364.20	
70歳以上	291	21.98	1891.32	
最終学歴				
中学校卒業	35	24.43	2803.51	$\chi^2 = 86.50$ d.f. = 6 p < 0.001
高等学校卒業	1,451	23.77	2528.39	
短大、高等専門学校卒業	365	25.78	3212.58	
専門学校卒	455	25.16	2998.96	
大学卒業	2,849	24.72	2828.82	
大学院修了	437	25.31	3083.96	
その他	29	25.59	3093.17	
指導頻度				
ほぼ毎日	744	25.43	2596.18	$\chi^2 = 50.18$ d.f. = 9 p < 0.001
週に4～5回程度	888	24.82	2429.10	
週に2～3回程度	1,434	24.08	2226.80	
週に1回程度	756	24.23	2240.29	
月に2～3回程度	361	24.20	2235.54	
月に1回程度	189	24.81	2438.45	
2～3ヶ月に1回程度	162	24.74	2474.53	
半年に1回程度	97	24.70	2396.61	
1年に1回程度	56	25.21	2510.22	
それ以下	13	23.54	2311.50	
指導レベル				
国際レベル	420	25.45	3072.70	$\chi^2 = 34.28$ d.f. = 5 p < 0.001
全国レベル	1,956	24.44	2740.80	
地域レベル	594	24.52	2812.95	
都道府県レベル	1,087	24.29	2690.98	
市区町村レベル	749	24.56	2793.11	
その他	815	25.23	3019.72	

友好的な価値観をもっていることを意味している。しかし「上級指導員」と「上級教師」においてはその傾向は逆転し、これら上級資格を保有している人はそうでない人と比べて同性愛を嫌悪する傾向がみられることになる。特に「教師」の資格を保有する人はそう

でない人よりも同性愛嫌悪傾向が弱く、上級教師とは反対の傾向を示している。資格階梯が上がると同性愛嫌悪が強まるとは考えにくく、それぞれの指導者資格を構成する性別や年齢層の影響を受けた傾向だと思われる。

e) 指導の有無 (表3)：調査前1年間に実際に

表3 指導者資格と指導の有無における同性愛嫌悪感の平均値の差の検定：Mann-Whitney検定による

		n	算術平均値	平均ランク	統計値
指導者資格					
指導員	あり	3,130	24.63	2807.98	3888961.5
	なし	2,491	24.62	2814.80	n.s.
上級指導員	あり	526	23.72	2531.81	1193133.5
	なし	5,095	24.72	2839.82	p < 0.001
コーチ	あり	4,719	24.59	2811.96	2127404.5
	なし	902	24.63	2810.82	n.s.
上級コーチ	あり	221	24.52	2799.28	594109.0
	なし	5,400	24.63	2811.48	n.s.
教師	あり	331	25.64	3160.63	759768.0
	なし	5,290	24.56	2789.12	p < 0.001
上級教師	あり	45	22.42	2015.91	89681.0
	なし	5,576	24.64	2817.42	p < 0.01
スポーツプログラマー	あり	124	24.83	2949.00	323701.5
	なし	5,497	24.62	2807.89	n.s.
フィットネストレーナー	あり	25	24.20	2784.20	69280.0
	なし	5,596	24.63	2811.12	n.s.
ジュニアスポーツ指導員	あり	441	24.34	2707.87	1096708.5
	なし	5,180	24.65	2819.78	n.s.
アスレティックトレーナー	あり	236	26.06	3245.82	532811.5
	なし	5,385	24.56	2791.94	p < 0.001
スポーツドクター	あり	158	24.82	2919.33	414460.5
	なし	5,463	24.62	2807.87	n.s.
スポーツデンティスト	あり	29	23.52	2447.17	70533.0
	なし	5,592	24.63	2812.89	n.s.
スポーツ栄養士	あり	38	26.97	3669.29	73462.0
	なし	5,583	24.61	2805.16	p < 0.01
アシスタントマネジャー	あり	289	24.64	2798.85	766963.5
	なし	5,332	24.62	2811.66	n.s.
クラブマネジャー	あり	49	23.78	2460.65	119347.0
	なし	5,572	24.63	2814.08	n.s.
(旧資格)スポーツトレーナー	あり	18	24.72	2856.22	49613.0
	なし	5,603	24.62	2810.85	n.s.
その他	あり	138	25.46	3013.63	350364.5
	なし	5,483	24.60	2805.90	n.s.
指導の有無					
指導しなかった		921	25.04	2965.54	2022020.5
指導した		4,700	24.54	2780.72	p < 0.01

※1：統計値の上段はMann-WhitneyのU値

指導をしたか否かによって比較したところ、同性愛嫌悪感の平均値に1%水準で有意な差が認められた。指導しなかったと答えた人たちの平均値が指導をした人たちの平均値よりも高く、同性愛に友好的な価値観を示した。

f) 指導頻度(表2)：過去1年間に指導をしたと回答した人を対象に、指導の頻度について質問した。指導頻度カテゴリ間の平均値には0.1%水準で有意な差が認められた。最も得点が高かったのが「ほぼ毎日」指導をしてい

る人たちであったが、2番目に高かったのは「年に1回程度」しか指導をしない人たちであった。それ以外の指導頻度カテゴリをみても、指導頻度と同性愛嫌悪傾向の間に一貫した関連は認められない。

- g) 指導レベル(表2): 指導対象の競技者が出場した最高レベルの競技会や大会について質問した。指導レベルのカテゴリ間には0.1%水準で有意な差が認められた。平均ランクや平均値が最も高く同性愛に友好的な価値観を持っていたのは「国際レベル」の競技者を指導した指導者であった。次いで「その他」が2番目に高い値を示したが、ここでの「その他」とは指導対象のパフォーマンスが競技会等への出場といったかたちで表すことのできない指導者たちである。残差分析を行った結果、「全国レベル」「地方レベル」「都道府県レベル」「市区町村レベル」の競技者を指導した指導者たちの得点間には有意な差は認められなかった。つまり、「全国レベル」「地方

レベル」「都道府県レベル」「市区町村レベル」の競技者を指導した指導者たちは、同性愛嫌悪傾向に関しては一つのグループを形成しているとみなすことができる。したがって、「全国レベル」から「市区町村レベル」までのグループに対して「国際レベル」や「その他」の競技パフォーマンスを示す指導者のほうが、同性愛に対して友好的な価値観をもっているといえる。

参考文献

- Hudson, W. and Ricketts, W. (1980) A Strategy for the measure of homophobia. *Journal of Homosexuality*, 5 : 357-372.
- 飯田貴子・藤山新・風間孝・來田享子・藤原直子・吉川康夫(2016)「体育・スポーツ関連学部の大学生を対象としたスポーツと性的マイノリティに関する調査結果 第2報 性別、LGBTの知人の有無、競技レベルに着目して」*スポーツとジェンダー研究*14 : 21-32.